
【スパイラル・トライアングル】

神無月によ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【スパイラル・トライアングル】

【Nコード】

N 6 7 1 2 Z

【作者名】

神無月によ

【あらすじ】

正暦一九九一年。帰るべき世界を失った孤独な少女は、不器用な死霊魔術師と出会い――
ネクロマンサー

正暦二〇〇〇年。互いを思いやる可憐な姉妹は、奇妙な白衣の女と悪趣味な灰色装束の傭兵たちと、横暴なテロ組織に出会い――
正暦二〇〇四年。中性的な容姿の少年は、雨の気配を感じながら、傍らの少女に過去を語った。

この物語は、【キセキシリーズ】と世界観を共有しております

が、時系列が大幅に異なるので、単体で読んでも問題ありません。
この物語は現代風異世界ファンタジーです。つまりは、フィクション。実在する人物、団体、事件、その他、一切関係ありません。

spiral | 3 西暦二〇〇四年 エピローグのプロローグ（前書き）

この物語は、【キセキシリーズ】と世界観を共有しておりますが、時系列が大幅に異なるので、単体で読んでも問題ありません。この物語は現代風異世界ファンタジーです。つまりは、フィクション。実在する人物、団体、事件、その他、一切関係ありません。

ここに、雑木林に埋もれるようにして山奥にひっそりと佇む古びた屋敷がある。

下手をすると築何百年は突破しているのではないだろうか、相当な年季が入っている木造だ。

外観は不吉にも黒く、かなり薄気味が悪い。

特に夜になると、空から押し寄せる闇さえも蹂躪されることを恐れ裸足で逃げるかのように、暗闇の中で不思議と圧倒的な存在感で屹立する。

現在、陽射しが傾き始めている昼間の明るさでもってしても、あまり頼りには感じない。

山奥という立地も関係しているのだろう、ほとんどの時間帯に係なく、人を寄せつけない異空間のきらいがある土地だった。

けれど、それは部外者の感想に過ぎない。

住めば都。

すなわち、この建て壊しが決まっていそうな屋敷の住人たちは、自分たちが住まう世界観になんら疑問を抱いていないのだった。

——そう、数名の住人がいるのである。

幽霊屋敷と呼ばれても違和感どころか至言とも思われる、このオンボロ屋敷には。

とは言え、生活感は皆無だ。

本当に人が住んでいるのかも怪しい。

少なくとも外から見た様子では、誰もいないように見える。

その最たる例が庭のあり様かもしれない。

敷地内には広さだけは立派な庭園があるのだが、ほとんど無法地帯に等しく荒れていて、整備されている様子がないのだ。

家主が自分で手入れすることもなければ、庭師も雇っていないか

らだった。

花壇に剥き出しの土や枯れ木が寂しい。

流れる冷たい風に煽られて枯れ葉が宙を舞っている。

季節は秋から冬へと移ろい始めていた。

——ギシッ、ギシッ、ギシッ

外気の寒さも手伝って、無駄に広い屋敷内の長い長い廊下も、ひどく乾燥している。

歩く度に軋む床の音が、足の裏を底に沈ませていくような錯覚を生んだ。

——ギシッ、ギシッ、ギシッ

廊下に響く乾いた足音が、まるで『この世には永遠などない』と語っているようであった。

どれだけ丁寧な愛情を込めて手入れをしようと、物はいずれ壊れ朽ちていくもの。

この屋敷も相当な長寿のようだが、それでも至るところに限界の兆候が見受けられる。

人の倍近歳月を、この地に根を張って過ごしてきたのだろう。

——ギシッ、ギシッ、ギシッ

二人分、軋む足音が一定のリズムを刻んでいる。

しかし、ふいに片方の音が止まった。

並んで歩いていた、歩幅の狭い足音も数歩進んでから気がついたように停止する。

「ライト君？」

少女は立ち止まり、左半身だけ振り向く形で踵を返した。

その拍子にギシッ、と床が鳴く。

少女の年齢は、まだ一四歳ほどだ。

しかし、小顔の中にしっかりとした顔立ちと知的な双眸、賢そうな雰囲気と引き締めていて、小さくて可愛い女性秘書とい

ったイメージをまとっている。

茶色い前髪を左サイドの深めからアシンメトリーにしてヘアピンで留め、後ろはシュシュを使ってアップにしている。

同系色のシャツ地とレースを合わせたベージュのワンピース、ではなく、スーツでも着用していれば本当に秘書に見えただろう。

少女イリヤの視線の先にいるのは、当然ながら社長ではない。

彼女よりも二歳年上の少年だ。

目を引く外見的特徴と言えば、宝石じみた金髪金眼か。

けれど、その輝きは人間の強欲を満たすためだけの浅ましい色ではなく、ただひたすらに超然とした唯一無二の一色である。

シミ一つない色白な肌と、線が細いシャープな体つき、女の子寄りの中性的な顔立ちは、ますます彼の金髪金眼の美麗を際立たせていた。

少年の名はライト・グランデール・ナイトパレード。

嵐で崩れ落ちそうなこの屋敷を拠点に、世界中を視野に入れて事業を進めている『事務所』の副所長である。

「どうしたんですか、ライト君」

先程イリヤが問いかけてもライトは無言で、雲の陰りが差し始めている空を窓から覗いていたので、少女はもう一度、声をかけた。

小さいけれど、芯があって透き通ったイリヤの声。

ピアノの伴奏に合わせて語るように歌えば、とても耳心地の良さそうな旋律になりそうなものだ。

そんな感想は心の中に留めながら、ライトは視線を庭園から屋敷の廊下内に戻した。

悲しくて泣いている子供をそつとあやすかのように、柔らかく微笑む。

屋敷の窓から差し込む、おそらく今日最後の陽射しとなるであろう光が、きらきらと少年の繊細な金髪を反射した。

その煌めきがあまりにも綺麗だったものだから、イリヤは一瞬だけ心を奪われた。

その気持ちを悟られるのが恥ずかしくて、彼女は書類を挟んでいるファイルを抱え直す仕種で誤魔化す。

たぶん誤魔化しの効果は生じていないだろうけれど。

と、少年が口を開いた。

廊下の冷え切った空気と、イリヤの聴覚を優しく震わせたのは、温かいテノールだった。

「この世には二種類の人間がいる。分かる？」

ああ、また始まった……、とイリヤの内心には嫌な予感しか生まれなかった。

ライトは彼女の心中を知ってか知らずか、構わず声帯を開く。

「それはね——それは、一二歳以下の幼女（僕の基準）を愛でる紳士と、そうでない変態だ」

「……」

ああ、もうっ、ホントこれさえっ、これさえなければっ！

とイリヤは心の底から残念に思う。

そんな想いが溜息となって少女の唇からこぼれた後、彼女は半眼でライトの清々しそうな表情を睨んだ。

「人間という壮大な括りで、変な定義を作らないで下さい。ハッキリ言ってライト君以外の人間にとても失礼ですし、思いつ切り男性目線の発言ですし、たぶん変態と紳士の供述が逆です」

しかし、ライトはイリヤの正論に聞く耳を持たず、意味不明な自論を並び立て始めた。

こうなると、彼はなかなか止まらない。

「そして、この世には二種類の女性しかいないんだ。世界の宝である一二歳以下の女の子と、そうでないお年寄りの女性たちだ」

「発言には注意と自己責任を。でないと、この私を含めてこの世の

全ての女性に命を狙われかねませんよ、ハッキリ言って」

「けれどね、考えてもごらんよ、イリヤ君。この世には二種類の僕しかないんだよ。三次元の少女にしか興味がない紳士な僕と、一歳以上に達してしまった女性たちの救済——つまり、女性たちの年齢の退化化を諦められない紳士な僕だ」

「『けれど』の使い方と、ライト君の頭がおかしいです。要するに、ライト君は自身を単なる変態として扱ってくれと言いたいのですか？」

イリヤは軽蔑の色を込めて見つめ返す。

だが、ライトに堪える様子はない。

彼は他人の評価を気にしない。

だからどこまでも温厚な表情で、静かに唱えるのだ。

彼にその意図はなくても、自身の変態加減を露呈する形で。

「この世には二種類のロリコンがいる。分かるかい？ 幼女を目視しても我慢できる紳士と、色々と我慢できなくなっちゃう変態だよ」

「一応、紳士も我慢しなくてはならない状態にあるんですね。ロリコンである限り、紳士だろうと変態だろうと紙一重なんでしたら、ハッキリ言ってどっちも捕まえれば良いのに」

ほとんど四六時中こんなことばかりのたまっている一六歳の少年に対して、正常な一四歳の少女は変なイキモノでも発見したかのような眼差しを向け、それでも律儀に受け答える。

ロリコンはロリコンでも相手は書類上、彼女の上司にあたるのだから仕方がない。

セクハラで所長などに訴えないのは、物理的に被害を受けているわけではないからだった。

「この世には二種類の犯罪者がいる」

「まだ続くんですか？」

辟易しながら訊ねるけれど、真のロリコンは動じない。

「警察に捕まる大変、変態なロリコンと、捕まらない紳士だ」

「捕まらなければ紳士って……しかも、犯罪者はロリコンばかりみ

たいな言い方しないでください。ハッキリ言ってライト君ほど特殊なのは、そうそういませんから」

この際『たぶん』とは付け加えない。

ごめんなさい。

「いや、そうでもないよ。この世には二種類の人間がいるんだ。小等部の教師になれる勝ち組紳士と、なれない負け組変態だ。プールの時間タダ見とか……ッ」

「いやいや、前後の台詞に関係性を見出すとしたらテーマが『一二歳以下の女の子は最高』という逮捕的な部分だけで、『いや、そうでもないよ』という否定を挟む必要性はありませんでしたし、小等部の教師になることだけが人生ではありませんから、涙流しながら悔しそうに言わないでください。それに小等部の教師になる動機が不純すぎて紳士と呼ぶのには、勇気がいります」

「うつつ」

「もう、そんなんじゃ結婚どころか彼女もできませんよ？ ハッキリ言って」

「うん、このままじゃダメだってことくらい僕も分かっているよ。」

「一二歳以下とは結婚も交際も難しいからね。心配しなくても僕が法を変えてみせるよ」

「そこは全然心配してませんから、お気遣いなく」

この変態は、一二歳以上との恋愛は最初から考えにないらしい。

「良いかい、イリヤ君？ 一二歳までの女の子なら無条件で助けるのが、紳士道精神の基本だよ。異論を唱えるのは結構だけど、聞く耳を持つつもりはない。幼女バンザイ。美幼女なら、なおバンザイ。微幼女でも世界の財産。そこに存在するだけで皆の視界を潤わせる情報力を持つ個体なんて、他のどんな生物が有しているというのか（いや、いない）」

「もう分かりましたから、どうか捕まらないで下さいね」

そこはかとなく流すように言った。

すると、ライトは怪訝な様相で、

「捕まる？ 安心してよ。証拠は残さないのが僕のポリシーだから」
「どこの幼女に、どんな事実だけを残してきたんですか！？」

「やっぱり警察行きましょう！ 一緒に頭を下げてあげますからね！？」 とかなり取り乱した様子でわたたとライトの腕を引っ張るイリヤ。

「ん？ 何を勘違いしているんだい、イリヤ君？ 僕はどれほどの罪人だろうと相手が一二歳以下の幼女なら指一本触れないよ？ 少なくともこちらからは」

あつ、とイリヤは声を上げた。

ライトは言う。

「いやね、低気圧が近づいてるらしいから、天気予報通りになりそうだと思っただけだよ、さっき外を覗いていたのは」

途端、イリヤの全身から力が抜けて、

「えつと、肘、痛む？」

訊ねると、ライトは軽く首を横に振って否定を示した。

「意識したら、くらいのレベルだよ。別のことに集中すれば忘れる」

ライトの声は本当に子守唄のように優しい響きを内包している。

滑らかに紡がれる言葉のリズムと、低めのトーンが柔和な物言いと調和して甘く溶け合い、彼のまとう空気を一段先へ大人びたものになっているのだ。

思春期真っ只中の乙女としては、少しでも気を緩めているとライトの態度が少しクラツときてしまうものがあったて、微熱を帯びる顔を目の前の本人に悟られないよう、必死に頬に灯る火照りを冷ましたいわけなのだけれど、冷ます方法と言えば冷水を頭から浴びて邪念を払い、脳内をクリーンにすることに限るわけなのだけれど、今そんな奇行に走ったら単なる変人に降格してしまうゆえに、精神面から『自分、落ち着け』とアプローチするしかなかったわけなのだけれど……。

「ごめん、行こうか」

イリヤの小さな頷きを待ってから、再びライトは廊下を歩き出し

た。

二人の歩幅は違うから、自然とライトがイリヤのテンポに合わせる形になる。

ギシッ、ギシッ、ギシッ、と傷んだ木がしなる音。

床が抜けるのではないかと不安を抱かせるそれが、静寂と冬の寒さに包まれている屋敷内に染み込んでいく。

二人分の足音が長い廊下に行く。

二人分の足音が長い廊下に流れる。

その静けさに耐えかねたわけでもなかったが、

「ライト君。今日、所長は？」

イリヤは前を見ながら問うた。

傍らを並歩するライトが答える。

「予定では帰ってくるはずなんだけど、たぶん例年通りだと思うよ。所長のスケジュールなんて予定があつてないようなものだから。所長が出張先から、この事務所兼社員寮になつてる幽霊屋敷に帰ってくる総日数、一年でどれくらいだか覚えてる？」

「多くて一週間、少なくて三日ですよね」

「正解」

隣を共に歩く少年がにつこりと笑む。

ちよつと金髪が眩しい。

イリヤは冷淡なふりを装って、自身の気持ちを偽るように、

「大変なんですね」

「所長が？ それとも僕が？」

「どっちもですっ」

ライトは分かっているのに、わざと質問して解答させる癖がある。ツン、と言つてのけたイリヤに、ライトは軽く笑い声をあげた。

愛想笑いのようにも聞こえるが、そうではないことを四年の月日がイリヤに教えてくれた。

「所長のあれは好きでやつてる病気みたいなものだし、確かに四年前まで僕も大変だったと自覚してるけど、今はそうでもないよ」

「そうなんですか？」

「僕は副所長なんていう肩書のデスクを与えられてるけど、その実それは所長と僕の二人で切り盛りしてた頃の名残だし、今は単なる雑用係だよ。それに思い出してごらん」

ライトは右手の人差し指で足元を示した。

「四年前、最初はジオフロントで三〇人も世話をしていただろう？でも、所長がほぼ年中無休で世界中を飛び回ってるから、一〇人まで減った。君たちのような優秀な人材も確保できたしね。まあクリスさんとかグレン夫妻、レスタさん、ウスタックさん、メリツサさん、アランさんは僕たちみたいにオカルトサイドの担当じゃないから、ここには顔出さないんだけどね」

「……私、四年もここにいますけど、所長や皆のことあんまり知らないんですね」

「無理もないよ。ほとんど事務所にいないんだから。それに所長の出先は、基本的に火薬臭い鉛玉が飛び交っている紛争地域だったり、悲鳴とか血生臭いオーラがわだかまっているギャング抗争の巣窟だったり、内乱で倒れそうな国の中だったり、危ないところばかりなんだ。ついていっても、イリヤ君は身が持たない」

「それなら、少し話してくれませんか。所長のことや、四年前のこと。私、まだ分かっていないことが多いです。そろそろ真相を知ってもいい頃ではないかと」

「いいよ。所長からは、すでにゴーサイン出てるしね」

ライトはあっさりと承諾し、少女めいた顔でいつものように微笑んだ。

「歩きながら話そっか。どうせ廊下はまだ続くんだし」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6712z/>

【スパイラル・トライアングル】

2011年12月22日17時52分発行